
街角悪魔

あららぎ慎駒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

街角悪魔

【Nコード】

N1908C

【作者名】

あららぎ慎駒

【あらすじ】

電車に乗って学校に向かう。そして思う。つまらない、と。そんなある日、私は悪魔を見た。それは恐怖の前触れだった。

『間もなく一番線に電車が参ります。白線の内側でお待ちください』

聞き飽きたアナウンスと同時に鉄の塊が停まる。開いたドアに吸い込まれるようにして一斉にその中になだれ込む。そのまま数歩進んで反対側のドアの前に立つ。このドアは私が降りる駅まで開かない。

朝の通勤、通学で込み合う時間帯も、田舎の電車はたいしたことはない。鞆を足元に置き、自分のスペースを確保することもできる。痴漢の心配も特にない。

ドアが閉まると、ゆっくり景色が流れる。青々とした草木が多い。自然豊かと言えば聞こえは良いが、私にはつまらない場所にしか感じない。

そう、つまらない。学校の勉強も部活も人間関係も。

ここで電車が止まったりしたら学校行かなくてもいいかな。事故でも起こったら、電車止まるかも。そんな事を今までに何度か考えた。

たぶん今も考えてる。

流れる景色が少し変わり、小さなマンションやアパートが増えてくると、電車は減速を始める。手すりにつかまって、傾く体を支える。

『間もなくA駅、A駅でございます。』

電車がホームに差し掛かる。反対方向の電車を待つ人の群れは溢れ出しそうになっている。

突如視界は変わり、朝日が遮られ、それぞれの方向に向かう電車が二本、平行に並んだ。

外を眺めていた私は、反対側の電車に乗り吊り革に捕まる女子高生と目が合った。これだけの人数が集まる場所では珍しいことでは

ないが、気まずさを感じた私は目を逸らした。

するとその女子高生の肩辺りに黒い影のようなものが見えた。何故だかそれに引き付けられた。

最初は光の具合でそれが見えたのだと思った。でも大勢の人で、私もむこうも影の中。次から次へと考えられる可能性を挙げていく。寝不足、ストレス、視力低下……。しかしそれらは脳内ですべて否定される。不気味な感覚を覚え、背に汗が流れるのを感じた。

そしてそれは、突如、姿を現した。

悪魔だ……

そう直感した。ゲームに出てくるような黒いそいつは、静かに、しかし確かに立っていた。

私は恐怖を覚えた。そいつから目を離すことも、身動きをとることも出来なくなる。心臓をわしづかみにされるような、苦しさと恐ろしさを全身で感じていた。

突如、激しい頭痛に襲われる。かと思えば、私の金縛りは解け、どちらともなく電車が動き出す。

あいつの姿は、無い。

まだ、緊張で心臓が高鳴るように胸のあたりが落ち着かない。必死で意識を見慣れた景色に集中させる。

遠くまで続く開けた風景は何の刺激もなく、それがかえって良いように思えた。

それでも、いたるところから流れ出した汗の存在は変わらない。

このいやな感じは、まだ消えてくれない。

『間もなくB駅、B駅でございます。』

アナウンスが入り、電車が減速を始めた時だった。

「キヤーツ！」

女性の悲鳴が聞こえると同時に、激しい揺れが起こり、焦げ臭い独特の臭いが鼻腔を刺激する。

車内は騒然となる。

異様な雰囲気に乗せたまま、一両目がホームに入ったところで電

車は止まる。

何となく察しはついた。

線路を挟み反対側のホームを見れば、まだまばらではあるが人が集まっている。中には顔を背けている女性もいたが、その人達の視線の先はなぜか私。違う。私の足の下。

背中には怯える声、前方には意味深な視線、そんなものに挟まれながら、私は半ば好奇心のような物を感じていた。

ゆっくりと視界を移動させ、下の線路を覗き込むようにする。

「いやあっ！！」

私は悲鳴と共に後ずさり、誰かにぶつかったところで崩れ落ちた。そこには鮮やかなマニキュアが光る、白く細い腕があった。

乱れた呼吸を必死で整えようとするが、次第に荒さを増していく。女性の腕がすぐそこにあるのだ。もしかすると、私の足下にはその体もあるかもしれない。そう考えると、さらに恐怖が襲ってきた。その腕が、その体が、私に襲いかかってくるのでは、などと考えてしまうほど、私の気は動揺していた。

『ブルル…ブルル…』

いきなり制服のポケットから振動を感じ、体が跳ね上がる。しかしそれは慣れたはずの携帯電話からだった。

慌ててポケットから取り出せば、サブディスプレイには親友の名前が流れている。恐怖から逃れたい一心で、縋るように通話ボタンを押す。

「もーしもーし。宿題のノート見せてほしいんだけど、もうすぐ学校つく？」

いつもの調子で明るい声に緊張がとけていく。

「うん、今、B 駅なんだけど……。」

少し震える声を必死に操り状況を伝えようとする。しかし、それ以上の言葉が綴られる事はなかった。

携帯電話が床に落ちる。

体から力が抜ける代わりに、又しても恐怖が入り込む。

私はまた、黒い影を見た。ドアのガラスに写るあの黒い悪魔。その映像から、後ろに立っていることがはっきりとわかるのに、私はまた、動くことも出来ず震えている。

あいつもまた、ひとつも動きを見せない。私たちはガラスに映るお互いの虚像と睨み合う。静かな恐怖がじわじわと迫る。

そんな静寂の中、攻撃を仕掛けたのはあいつだった。

激しい頭痛が襲って来て、不意に私は睨み返す。悪魔を正面から直視した瞬間、私の頭痛はさらに激しくなり、ぐらりと体が傾きかけた。

それをこらえると、次に頭の中へ直接言葉が送り込まれる。

『事故でも起こったら、電車止まるかも』

「事故でも起こったら……っ!!」

それは紛れもなく、私の脳裏にある言葉だった。

「やめて! やめて!! やめてっ!!」

私は叫び続けた。私のせいじゃない。何も関係ない。何も知らない。

頭を抱えて崩れ落ちる私に、また視線が注がれた。背中に熱を感じるように、ひどく痛く感じた。

甲高い悲鳴。耳に残る金属音。振動。焦げるにおい。向かいのホームの視線。女性の腕。背後の視線。悪魔の言葉。この短時間にとらえた、ありとあらゆるものが一瞬にして体中を巡り、最後に私は意識を失った。

目を覚ましたのは、病室の真っ白なベッドの上だった。

私の片腕は包帯にまかれ、まっすぐに固定され動かなかった。

今まで以上に、何もない、つまらない日々の始まりだと思った。

悪魔が、笑った気がした。

（後書き）

おつきあいいただきありがとうございました。いろいろとメッセージを込めたつもりではありますが、何か残るものはあったでしょうか？感想、アドバイスなどいただけるとうれしいです。また、お会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908c/>

街角悪魔

2010年10月9日18時25分発行